

2022年度 同志社大学大学院 司法研究科

前期日程入学試験問題 法律科目試験

(刑 法)

次の（設例）を読んで、XおよびYの罪責について論じなさい（ただし、住居侵入罪および特別法違反の点を除く）。（配点：100点）

（設例）

Xは、生活費に窮したことから、友人のYに対し、「Aという老人が一人暮らしをしていて、自宅に大金をため込んでいるらしい。Aの家に押し入ってAから現金を強奪しよう。奪った現金は折半でどうだ。」と提案し、Yも、これに同意した。XとYは、A方とその付近の下見をした上、現金強奪の方法について相談した。XとYは、XがA方付近で見張りをしている間にYがA方内に侵入し、内部から入口の鍵を開けて侵入口を確保した後、XもA方内に侵入し、二人でAに暴行を加えAを抵抗できない状態にして現金を強奪するという計画を立てた。

翌日の夜、XがA方付近で見張りをしている間に、YがA方の窓から屋内に侵入し、内部からA方の玄関ドアの鍵を開けて侵入口を確保した。そのころ、Xは、A方付近に人が集まってきたのを見て犯行の発覚をおそれ、A方内にいるYに電話をかけ、「人が集まっている。やめよう。」と言った。しかし、Yが「このまま計画を実行する。」と答えたため、Xは、「俺は帰る。分け前もいらぬ。」と伝えた。Yは、「分かった。あとは俺一人でやる。」と答えた。

Xが現場から立ち去った後、Yは、Xから事前に渡された特殊警棒でAの頭部等を何度も殴打し、Aを動けないようにした後、Aの現金100万円を自分の鞆の中に入れた。その後、Aは、Yの殴打によって生じた脳内出血により死亡した。なお、Yには、Aを死亡させる意思はなかった。

Yは、Xの言うようにA方付近に人が集まっているのであれば、A方に火を放って全焼させ、その混乱に乗じて逃走しようと考え、Aが死亡していることを認識しながら、新聞紙に火を付けてA方の居間に投げ入れ、その場から逃走した。火は、A方の居間の畳約3平方メートルを焼いた後、消えた。

Aは、A方で一人暮らしをしており、また、Yが火を放ったとき、A方にはYしかいなかった。Yは、その事実を認識していた。

もっとも、A方は、Aの実子であるBが住むB方と木造の渡り廊下（長さ約5メートル）でつながっており、Bは、毎日、頻繁にA方を訪れていたが、Yは、これらの事実を知らなかった。